



「一〇〇八年十一月四日の夜、バラック・オバマの大統領選挙を祝うために十二万五千人もの人々がシカゴ市のGrant Parkに集まった。史上初の黒人(註1)大統領誕生に、黒人だけでなく、あらゆる人種、異なる宗教・文化背景の人々が肩を並べ、涙を流しながら抱き合い、喜びを分かちあった。

それから二日後、予備選のときからオバマ支持の演奏をしてきた「The Decemberist」のコンサートに行く機会に恵まれた。このバンドのファン層は圧倒的に三十歳以下で、レキシントン高校(LHS)に通う娘と友人たちの引率という言い訳がなければ、四十代後半の私には足を踏み入れにくい場所である。

その夜私が音楽以上に楽しんだのは、オバマの当選を祝う新しい世代のエネルギーだった。バンドのフロントマン、コリン・メロイがオバマを「われわれの大統領」と呼ぶと若い観衆は総立ちの大歓声で応えた。メロイがキャンペーンの合い言葉だった「Yes, we can!」と呼びかける。観衆は「Yes, we did!」と応える。そして、コンサートの終盤で等身大のオバマの切り抜きが紹介され、ロックコンサートでおなじみのクラウド・サーフインをしたのは、いかにも若者らしい一体感の表明だった。

日本に住む私の父は、電話をするたびに「日本の政治家は腐っている」と怒り、「今の若者は無気力、無関心で日本の将来は闇だ」と嘆く。けれども、三十年前に私が大学で哲学を学ぶことに興味を示すと「きつと学生運動をする」と反対したのも彼である。私も理想主義の若者だったが、盲目的に体制を破壊することにエネルギーを注いでいるような学生運動には反感しか覚えなかった。その私を同級生たちは「無関心」と非難した。日本の若者には「破壊」と「無関心」のふたつの選択しかないのだろうか？

アメリカでもベトナム戦争に反対した左翼学生団体の「ウエザーアンダーグラウンド」に代表されるように若者たちが暴力による改革を試みた時代があった。体制への不満は当時のように高まっている。プッシュ大統領のもとで環境破壊が進み、対話を中心とした外交が消えて戦争という名で他国に侵略をするアメリカになった。だが彼らは、憤りのエネルギーを「破壊」ではなく「改善」に向けた。「よい大統領を選出することで国や世界を変えよう」、「そのためにボランティアで選挙運動をしよう」、それがオバマ支持者にとつての「愛国心」の表現だった。たぶんそこが日本の若者との大きな差だろう。

コンサートに連れて行った娘と友人の会話を盗み聞きすると、大統領候補の政策のみならず主席補佐官(Chief of Staff)にまで話題が及ぶ。日本の高校生とはすでにそこが異なる。特にLHSの生徒は「他校よりも政治や社会正義の実現に関心がある」母校を誇りにしているようだ。リベラルな親の影響とばかりはいえ

ないだろう。なぜなら、政治に無関心で教育熱心なアジア系移民の親を持つ生徒でさえ、世界を変えたい」という意欲を口にしているのだから。

ジュニアの夏にMITの権威あるリサーチプログラムに受け入れられ、MITとハーバード大学の両方に合格した中国系二世のアルバートは、数学と科学の優れた才能を持ちながらも、大学では政治を学びたいという意欲を語った。同じく親が中国大陸出身で数学と科学が得意なステファニーは、将来医学を学ぶ可能性を残しながらも、大学でジャーナリズムを学んでいる。彼らは、移民の親とは異なり、アメリカ合衆国を「私の国」と実感している。

四年前LHSのジュニアだったエリックは、公立学校での民主主義教育が生徒に与える影響を教えにくれた生徒のひとりである。彼は学生評議員、学生新聞の記

者、同性愛・性同一性障害の生徒が差別をされないように活動する「ゲイ・ストリート連合」のメンバー、生徒間の争いを調停する「学生調停者」などを兼任し、キリスト教保守派の攻撃からレキシントン公立学校を守る組織「レキシントン・ケアーズ」では大人からも重視されるリーダーのひとりだった。私が会ったときには、ロムニー州知事が拒否権を行使した「安全な学校と自殺防止プログラム」のための資金を州議員に覆してもらうために奔走しており、法案の内容と現状を町民に理解してもらおう記事を地元新聞に書く目的で州の代議士ジェイ・カウフマンを取材していた。

エリックが小学校三年生のときにクラス全員を州議会に招いてくれたのが、このカウフマンだった。その次には中学で別の代議士から歴史の授業で州議会の仕組みを学び、小学校五年生では担任から「自分の考えていることを他人に伝え、相手を説得するためにどう訴えればよいのか」というスピーチの基本を徹底的に教わり、「子どもも、もつと政治に関わるべきである」という初めての演説を行った。

民主主義がただの理念ではなく生活に密着したものだといエリックが学んだのは中学生のときの体験だった。不動産税の値上げ率限度を無効にして赤字を一時的に解消するオーバースライドが住民投票で否決され、「レックスプレス」というレキシントン町の公共バスが運行中止になった。運動できない子供や老人は身動きが取れなくなる。そこで交通機関部と行政委員を訪ね、住民公開の行政委員会でスピーチを行い、住民五百八十人の署名を集めた。エリックのたゆまぬ努力に動かされた行政委員会は「交通機関諮問委員会」を設けて彼を学生代表に起用し、住民に

働きかけることでバスを町に呼びもどした。体制を敵にしなければ望む結果を得られることをエリックは体験から学んだのだ。

エリックの逸話は、「諸君が国のために何をなしうるのかを問うて欲しい」というジョン・F・ケネディの就任演説の一節(註2)を思い出させる。

アメリカでも若者は肝心の投票日になるとすっぱかす「当てにならない世代」とみなされてきたが、今回の選挙では、四十八年前のケネディ大統領誕生のときのように、新しい世代が国と世界のために情熱をこめて働いた。オバマの選挙運動でボランティアをし、彼を当選に導いたアメリカの「新しい世代」に、私はおおいに期待している。

大統領史研究家のドリス・カーンズグッドウィンがオバマの勝利演説の後こう言ったのが印象に残った。「オバマ当選へのプロセスは」政治をふたたび尊敬に値する職業にすることでしょう(註3)」

註釈*1):オバマの父はケニア人で母はカンザス州生まれの白人
*2):ジョン・F・ケネディの就任演説の一部。
「My fellow Americans: ask not what your country can do for you? ask what you can do for your country.
『我が同胞であるアメリカ国民諸君。国が諸君のために何をしてくれるかを問うな。諸君が国のために、何をなしうるのかを問うて欲しい』
*3):「...make politics honorable vocation again」

★プロフィール★
わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学卒業、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年『ノーティアーズ』で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。2003年二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。
<著者のブログ>
<http://watanabeyukari.weblogs.jp/>